(2) *cf.* Ferdinand de Saussure, trans. Wade Baskin, *Course in General Linguistics.* (New York: McGraw-Hill, 1966), pp. 65-70.

(3) Saussure, p. 16.

(4) *cf.* Saussure, pp. 18-20.

(5) *cf.* Saussure, p. 23.

(6) 彼らの主著をあげると，Roland Barthes, "Introduction à l'analyse stracturale des récits," *Communication,* 8. 1966. 邦訳：花輪光訳「物語の構造分析序説」『物語の構造分析』（東京：みすず書房，1979），Claude Bremond, "Le message naratif," *Communication 4,* 1964. Tzvetan Todorov, *Grammaire du Décaméron* (The Hague: Mouton, 1969).

2 『ヴァルドマール』のテクスト分析について

金 岡 喜代美

ロラン・バルトが『S/Z』(1970)[1] で実践したテクスト分析のエッセンスを凝縮したのが『ポーのヴァルドマールのテクスト分析』(1973)[2] である。バルトは，テクストの概念を，意味が作用しつつある空間，過程，すなわち，「意味形成性」のことであるとし，テクストを，ある完結した，閉じた生産物としてではなく，進行中の生産行為とみなす。テクスト分析は，作品の構造を記述するのではなく，テクストの可動的な構造化作用を生みだそうと努める。それが目ざすところは，テクストの特定の，あるいは，一つの意味を見出すことではなく，テクストの複数性，その「意味形成性」の始まりを捉えることである。

テクスト分析では，作品をいくつものレクシ (lexie) に切り分け，それぞれのレクシについて，そのレクシが生ぜしめる第二次的な意味，すなわち，コノテーションを観察する。コードとは，これらの第二次的な意味が連合する場である。テクスト分析のねらいは，テクストの構造を再生成することではなく，テクストの構造化のあとをたどってゆくことであるから，作品の分析は，最初のレクシから順番に一つずつ行われる。その途中でいくつかの意味を見落とし

たとしても，見落とすこと自体が読みの一部であるとバルトは考える。このようにして，物語の時間的，通時的側面だけでなく，空間的，共時的側面が強調されているのである。また，物語の最小単位であるレクシは，いうなれば，音素のような働きをするものであり，各々のレクシの間には，ソシュールのいう連辞関係と連合関係を見ることができる。一つのレクシが意味をもつのは，各々のレクシに備わった特定の独立した性質によってではなく，その性質と，他のレクシがもつ，別の性質との間の差異によってである。そして，この差異を明らかにするための一つの指標として用いられるのがコードである。

テクスト分析の具体的な例として，『ヴァルドマール分析』の中から，“I am dead” という一文に関する内容をとりあげてみたい。これは，催眠術にかかったままの状態で，生死のあわいに眠るヴァルドマール氏の口許から聞こえてきたものである。この文のコノテーションとして，バルトは次のようないくつかの項目を挙げている。すなわち，“I am dead” という声は，その意味内容を伝える以前に，“I am speaking” と言っているのであるから，それは同語反復的な言語行為であること，“I am dead” は，「くたびれて死にそうだ」というようなメタファーとしてはよく用いられるけれども，ヴァルドマール氏の場合のように，字義どおりの意味で用いることはできないこと，一人称 “I” と “dead” という属性の結びつきは，厳密には不可能であること，また，意味論的見地からは，“I am dead” は「生」と「死」という二つの相反する要素を同時に主張しており，それは，“I am dead and not dead” という一つの新奇なカテゴリーを創り出していること，さらに，“I am dead” という文が字義どおりのものに戻るということは，元来，抑圧されていた「死」が，直接言語の中へと侵入してきたことを意味し，それが後に，“dead! dead!” という絶叫において爆発すること等。

“I am dead” という一文は，複数のコードに当てはまる。コードは厳密で絶対的な体系ではなく，その複数性を読者に強要するのが，テクスト特有の性質なのである。“I am dead” が同語反復，すなわち，それ自身を指し示しているということから，ここで意味をもつのは，発話がなされたということであって，それが誰によってなされたのか，また，その発話の内容は何であったのか，と

いうことではない。それは，誰であっても，何であってもかまわない。バルトによれば，その不確定さこそが，まさに，「意味形成性」であって，エクリチュールは，まさにそこのところに出現するのである。[3]

また，バルトは "I am dead" が不可能であることを主張するが，実は，この文の言語レベルでの不可能性は，「生」と「死」の二項対立の間で起こる境界侵犯と平行して生ずるものなのである。実際に，この奇妙な一文を含むレクシが物語全体の中でもつ意義というのは，ここにおいて「死」に対する「生」の侵入が起こったということであり，後にヴァルドマール氏が "dead! dead!" という絶叫とともに迎えた破局は，それに伴う，構造上，必然的な結果に他ならない。サラジーヌが男女の性の境界に位置することによって，語形論や文法やディスクールの境界が侵犯され，意味の廃絶が行なわれたのと同じことが，ここでも起こっているわけである。

「生」と「死」，「男性」と「女性」というような二項の対立は，そのままでは，字義どおりの意味しか持ち得ないが，その間の境界が侵犯される時，そこに新たな意味が生じてくる。それと同じことが，作品と読者との間にも起こり得ると思われる。作品と読者が対峙する時，両者の間にある種のコミュニケーションによる境界侵犯が行われるところに成立するもの，テクストの概念とは，まさにそのような性質を備えたものなのである。そして，作品の本質的な意味というものは，各々のテクストとは別に，独立して存在してはいるが，それ自体では，テクストの複数性という以外に，具現的な形で存在することはないのである。

〈註〉

（1） Roland Barthes, *S/Z*. (Paris: Seuil, 1970) 邦訳：沢崎浩平訳『S/Z』（東京：みすず書房，1973）.

（2） Roland Barthes, "Textual Analysis of Poe's 'Valdemar.'" *Untying the Text*. ed. R. Young (London: R. K. P., 1981).

（3） *cf*. Barthes, p. 158.